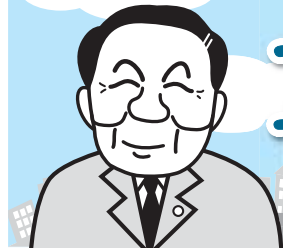


町長の一言



鶏足山への誘い

正月休みに、近所の人から「城里町で一番高い山へ登ってきたよ」と電話がありました。

これは、12月に下赤沢の鶏足山(けいそくさん)と一緒に「けいそくさん」に一緒に行こうとの誘いがあったのですが、町長は忙しくて都合がつかないと思って既に登ってきたとの報告でした。

鶏足山は、標高430mの町内最高峰で、頂上からの展望は素晴らしく、天気が良い日で朝早く登ったので、富士山から浅間山まで見渡せたことと、次回はずいぶん一緒にという事になりました。

このように、城里町の地域の中でも、私たちが



気付かないで見過ごしているすばらしい景色や、山や川、森の景観などが沢山あるのではないかと思います。

新しい観光資源を作り出すということも必要かもしれませんが、今ある地域の資源を再評価、再発見して活用していくことが大切ではないかと思っています。

城里町の中にある日本の原風景のようなものを残しながら、「人と自然が響きあう」地域を目指していきたいものです。

この内容は、町ホームページの「町長の部屋」の中でも掲載しています。ぜひご覧ください。

文芸しるさと

俳句

枯菊焚くうすき日ざしを翳らさ
飯 田 勇一
水掻きの足も浮力と白鳥来
一 木 雄一郎
ゴルフ場日の出を受けて山眠る
山 崎 正 行
鳥の声静かに聞けり白障子
飯 村 昭 子
冬菜畑足跡深く入りにけり
いそべ き よ
陽のあたる順に倒れて霜柱
阿久津 あい子
冬苺子の耳打ちの温かし
鯉 淵 寿美恵
切株の年輪いびつ冬の鴉
今 瀬 多代美
ふつくらと風船唐綿冬座敷
田 所 厚 子
門松の竹青々と初日の出
仲 田 こう
新聞のはみ出すポスト冬椿
仲 田 まちゑ
茎太き冬たんぼぼに屈みけり
和 田 範 子
柚子あまたばかりと湯治風呂
飯 村 愛 子
冬野菜道の駅にて買ひにけり
高 橋 芦 江
箱にしまふ聖樹は蓋を押し上げし
竹 内 幸 子
ストーブや一人居るには広き部屋
瀬 谷 博 子



短歌

父と同名ただそれだけに懐かしく父の顔頭つ「信夫温泉」
杉 山 みちこ
奥日光の紅葉真盛りたる「いろは坂」映像の中に吸われゆく思いす
宮 本 ふみ江
菊一花何百枚とふ花びらの一片ごと手入す栽培者は
所 美恵子
夫のことを讃えてくれたる教え子の師走のひとひ心暖かし
山 形 式 妙
姫宮の結婚式は豪華さけ新しき型を作り給ふか
藤 原 千 代
物置に「味噌焚き竈」の居座りて使わぬまゝに我は老いたり
青 柳 京 子
かすかなる音にふり向けば地に転ぶ椿の紅の未だ鮮らし
渡 辺 千紗子
朝早く山茶花の花にスズメバチの群がるを夫は補虫綱にて捉ふ
秋 山 愛 子
晩秋の刈田を抱く山間の空をカラフルな熱気球飛ぶ
大 森 久 子
伐採と決めたる甘柿この秋は幾年振りかで大き実生りぬ
佐 川 あ や
初もうで拍手打てばその響き神に届けよ私の願ひを
阿良山 ウメノ
久々に詣でる神社人の波手に伝わるや人の情が
市 川 義 子
山谷いのがけの下にふきのとう日だまりに小さい春を感じつ
岩 下 美知野

川柳

如月に合併なりて早や一年町と言う名に馴染みつつあり
岩 下 通 子
職退きて我に三年日が過ぎて郷の習いに馴染みつつ居り
山 口 崇
落ち葉せる鎮守の森を掃き清め極月の集いに障りあらせず
薄 井 ひ ろ
ひと吹きの風に落ち葉の吹雪きあり秋の陽ざしをしばし遮る
枝 不 美
忘れられしもの哀しみ伝へんか晩秋の風鈴ひそやかに鳴る
片 見 和 枝
山陰の残りの紅葉惜しみつつ、小春日和の山路分け入る
川 上 千代子
冷え著き師走の朝の空澄みて電話のベルの高く弾める
島 愛 子
砂を洗ふ小春日の浜に降り立ちて水平線に追ふ妹のまぼろし
多 田 志保子
年ひとつ加うるこのさみしさに「年」は思はず元気に生きむ
坪 井 きよ子
空と湖の間に望む水戸の街左方の山は秋色に染めらる
萩 谷 登喜子
母の遺品の鮮やかな色にはほえみぬ誰もが一度は意識するらし
和 知 美智子
オカリナのやさしき調に癒されつつストレッチ体操にひととき励む
富 田 佐智子
ランドセル居れば信号守るママ
山 本 隆 莊